

☆ 授業のヒント

今回は、日本語の文字がきれいに書けるようになるためのかなの教え方を紹介します。

テーマ かなの書き方の指導

目的	<ul style="list-style-type: none"> 日本語の文字を書くときのルールを知る 日本語のかなを書くときの注意点を知る
学習者のタイプ	<ul style="list-style-type: none"> 初級（入門）
クラスの数	<ul style="list-style-type: none"> 何人でも
準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> 特になし（練習用シートは適宜）

◆日本語の文字の学習

日本語には、ひらがな・カタカナ・漢字の3種類の文字があります。ひらがなとカタカナは中国の漢字をもとに、日本でつくられたものです。そのため、この3種類の文字の書き方には共通するルールがあります。学習者が初めてかな（ひらがなとカタカナ）を学習するとき、このルールを身につければ、あとで漢字を学習するときにも役に立ちます。

文字の学習には、読みと書きがあります（漢字にはさらに意味があります）。読みの学習は文字の形と音を結びつけること、書きの学習は文字の形を正確に書き写せるようになることが目標です。この2つの学習は同時に行われることも少なくありませんが、連想法による文字カード教材（『Hiragana in 48minutes』など）を利用すると、短時間で読みだけを学習することができます。そのあとでゆっくり時間をかけて書きを学習することも効果的です。

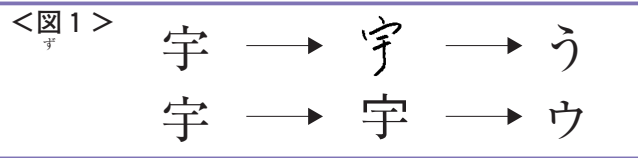
また、かなの学習では、ひらがなとカタカナのどちらを先にするか、という問題があります。一般的にはひらがなから学習することが多いと思いますが、海外では、学習者の名前や地名を表記する都合でカタカナから学習するケースもあるようです。また、曲線が多いひらがなよりも、直線的なカタカナのほうが書きやすいので、カタカナを先に学習したほうが良い、という意見もあります。ただ、やはりひらがなのほうが使用頻度が高いので、学習意欲の高い最初の段階で、先にひらがなを学習させ

るほうが多いようです。そして、カタカナは既習のひらがなと比較しながら導入して、次に漢字の導入としてカタカナを利用すると効率的です。

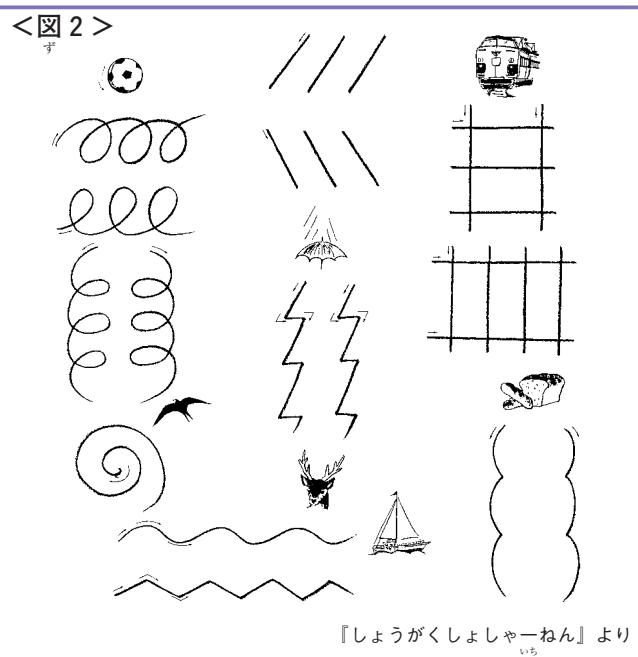
◆かなの書きの学習の準備

はじめに日本語の文字の書き方のルールを確認します。一番大切なルールは①上から下、②左から右ということです。これは線（専門的には「筆画」と言います）を書くときと、文字を組み立てるときの共通のルールです。もし、皆さんの国の文字のルールと違うときには特に注意が必要です。

次に、日本語の文字を書くときに必要ないろいろな線を書く練習をします。日本語のかなは漢字から作られたものですが、＜図1＞のようにひらがなは漢字全体をくずしたもののなので丸みをおびていて曲線が多く、カタカナは漢字の一部を使っているの全体に角張っていて直線的です。



ですから、このような線を取り出して、先に練習しておくといでしょう。＜図2＞は日本の小学校の「書写（かきかた）」の授業で使われる教材ですが、日本語の文字で使われるいろいろな線を、「電車の線路」や「ボール



『しょうがくしょしゃーねん』より

の動き」などのイメージで面白く練習できるように工夫されています（なお、この教材はすでに絶版になっていますので、これを参考にみなさんのアイデアで面白い教材を作ってください）。

◆かなの書きの導入

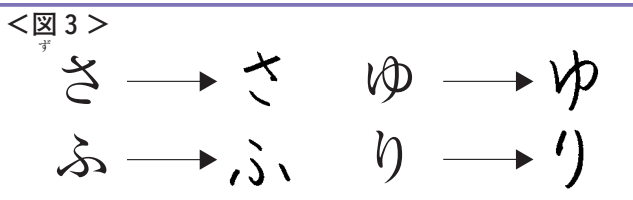
書きの学習の準備が終わったら、いよいよかなを導入します。1回に導入するかなは5～10字ぐらいが適当で、1字ずつ説明と練習をします。

はじめに、導入する字を教師が黒板に大きく書いて、その字を書くときの注意点を説明します。それから、教師はその字をなぞるように手を動かして、学習者にも手をあげて同じ動きをするようにしています（これを「空書」といいます）。このようにして、その字の形のイメージができてから、ノートに5回ぐらい書かせます。そうすれば正しい書き順も自然に身につきます。書きの練習では、1字ずつのマスをさらに4つに分けた黒板や練習シートを用意すると、字形のバランスがわかりやすいでしょう。

◆かなの書きの指導上の注意点

①印刷と手書きの文字の違い

日本語の印刷に使われる文字にはいろいろな字体があり、その中には以下のように手書きの文字とは字形がかなり違うものもあります。



このような印刷の文字は線を続けているものが多いですが、それは毛筆で書くときの勢いも取り入れた字体だからです。初めて日本語の文字を学習する学習者がまねをすると、すべて同じような線で書いてしまうので、不自然な字になってしまいます。

日本語の教材の中には「教科書体」という手書きに近い字体を使っているものもありますが、上の図の左のような字体の教材を使っている場合は注意してください。

②書き順

書き順は原則として前述の日本の文字の書き方のルールと同じです。ですから、かなの正しい書き順が身につけば、漢字の学習にも役に立ちます。また、いつも同じ書き順で書いたほうがきれいに書けるという意見もあり

ます。

③字形の許容範囲（どんな形がよいか）

手書きの文字には、上手な字、下手な字があると思いますが、一番大切なことは他の字と読み間違えられないようにすることです。ですから、字形を説明したり、学習者の書いた字を直すときにも、まずはそれを優先してください。

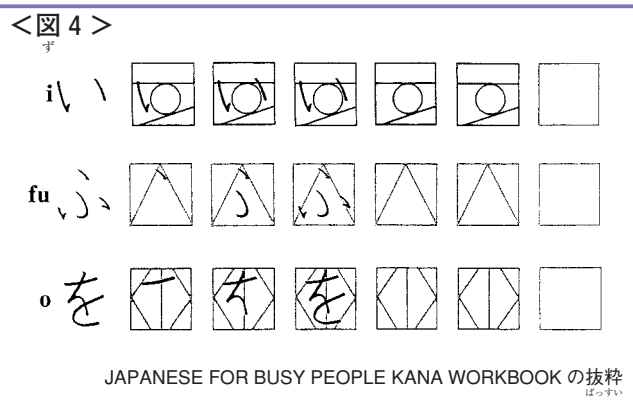
たとえばひらがなの「は」と「ほ」、「わ」と「ね」と「れ」など字形が似ている字は、違うところをていねいに教える必要があります。また、「い」と「こ」も書き順と傾きが変わると読み間違えられることがあります。

カタカナでは「シ」と「ツ」、「ソ」と「ン」のように、字形での区別が難しいものがありますが、線の方向や書き順を正しくするのがポイントです。

④字形の直し方

学習者が書いた字を直すときには、どこが違うのかがはっきりわかるように示すことが大切です。たとえば、線の方向が違うのか、字形のバランスが悪いのか、などです。それを示すためには、矢印（→）や「補助線」を使うと効果的です。

たとえば、「ふ」はバランスをとるのがとても難しい字ですが、字全体が三角形になるように書くときれいに書けます。このような一つ一つのかなの字形をイメージさせる教材もありますから、参考にするといいでしょう。



参考文献

- 国際交流基金日本語国際センター『日本語かな入門』凡人社（1978）
- 国際交流基金日本語国際センター『教師用日本語教育ハンドブックシリーズ②新表記』凡人社（1994）
- AJALT『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE KANA WORKBOOK』講談社インターナショナル（1996）
- 大阪書籍『しよがくしよしゃーねん』大阪書籍（1992）（絶版）

担当者が変わりました。小玉安恵、篠崎摂子（日本語国際センター専任講師）
読者の皆さんからのアイデア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。